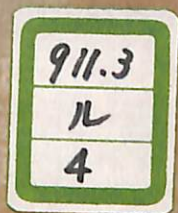


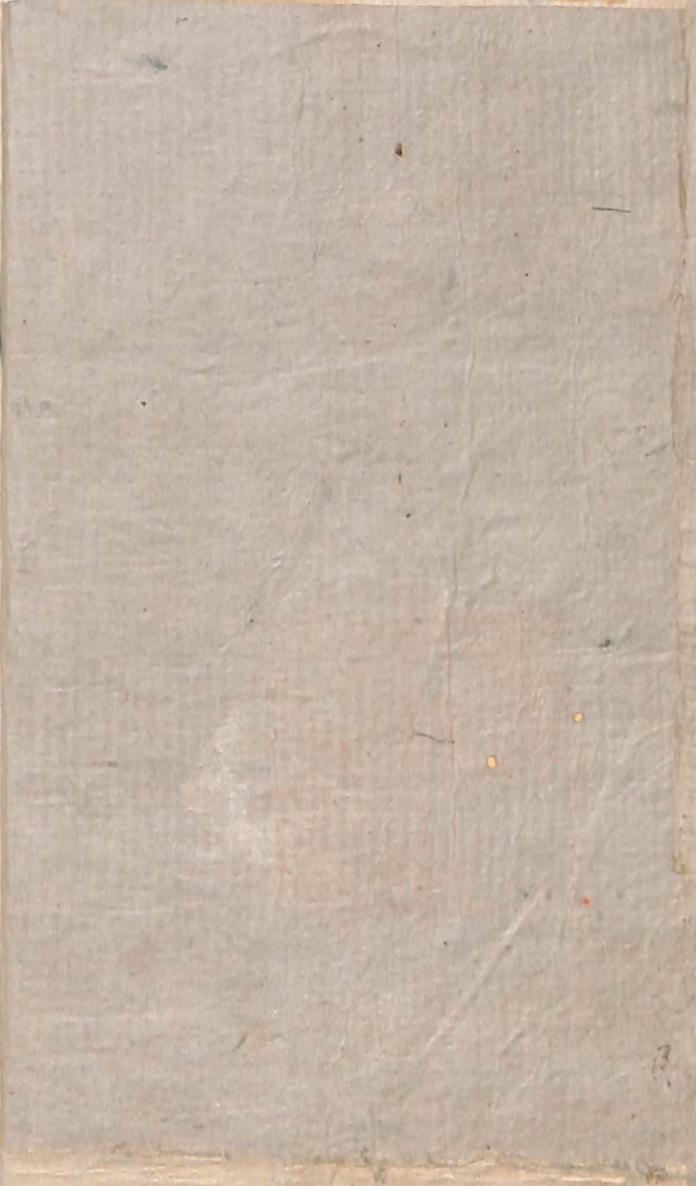
佛指山新受自集袖篇

四





Faint, illegible text in vertical columns on the left side of the page, possibly bleed-through from the reverse side.



類題十萬句集初編冬之部目錄

冬之上

十月初丁

神無月

小六月二丁

小春

初冬三丁

神留主

神送四丁

連戶忌

芭蕉忌

御命講

御取越

玄猪五丁

十夜

夷講六丁

初時雨七丁

時雨

初霜十一

霜

霜枯十三

霜柱

霜花

初雪

冬構十四

冬籠

炉十五

口切十六

寒

落葉十七

木葉十九

茶花

山茶花

帚

枇杷花 九二

枯尾花 九二

枯芒 九六

枯蔓 九六

枯菊 九六

冬木五 九六

鱗 九六

浮寐鳥 九三

千鳥 九三

柴漬 九三

十一月中

八手花 九三

枯草 九四

荻枯 九四

枯葛 九七

麥蔣 九七

枯野 九九

鰕 九九

鴨 九七

鴛鴦 九七

網代守 九七

紅葉散

枯柳 九四

枯葎 九四

枯躑躅 九四

大根引 九七

冬野 九七

生海鼠 九二

小鴨 九四

鷓鴣 九四

銀杏樹 九五

枯芦 九五

枯蓮 九五

石蔥花 九五

釣了菜 九八

冬枯 九八

水鳥 九八

可也鳥 九八

夜真曳 九八

十一月

禱着

吹葦祭

月牙

多

雪佛

棧

霰

田炉裏

炭

火桶

霜月

白見世

御講

冬月

雪

雪

氷

霽

火鉢

炭竈

冬至梅

冬至

子祭

里神樂

風

雪吹

雪垣

鐘水

冬雨

埋火

炭燒

冬梅

暖置

子燈心

鉢扣

雪

雪見

雪車

氷柱

巨燧

檜

炭俵

水

冬牡丹 卒一

暖鳥

冬鳥

冬之下

極月 卒四

事納

寒雨

衾

頭巾

寒菊

冬山

葱 卒二

鷹

王子酒 卒三

師走

藥噴

寒声

紙衣 卒七

湯婆 卒八

寒梅

冬日 七十

根深

鷹持

納豆

臘八

佛名會 卒五

寒月

蒲團

靴

冬椿 卒九

冬田

生薑

鷹野

衣配

寒入

寒念佛 卒六

足袋

臍

冬蠅

錦李候

煤掃

古曆

年市

年木

年宵

年別

厄拂

春待

餅搗 七十一

枋賣

年忘

年尾

年一夜 七十四

年暮

掛取

春近

歲暮 七十一

節分

年用意 七十三

年越

惜年

大晦日

罔見

年内春

曆賣

豆打

年木樵

行年

年名殘

除夜

春隣 七十五

冬題不知

冬

多子牡丹梅くくくくくくくく
 重層の李の白も市を絶る青條
 跡より松の房廣くくくくく
 守り六日産持くくくくく
 價義の善徳言中や未條
 持せくくくくくくくくく
 走河を草洗ひを物子條
 河れも舞於身も舞く未條
 鉄舌の乱舞も善やえんは條
 舟より桐も物もせ未條
 鑑より子洗ははあてえんは條

木目
 骨元
 一考
 石上
 夢月
 友之
 左巻
 三光
 紫忠

初時雨

池の切も味くくくくく
 詠ひの暖答も出きてえんは條
 川留より幸やえんはくくく
 栲舟よりうたれくく極子條
 初志れもぬき菴の手栲在
 管舟よりも考持ん初くく
 初時雨の降くく雨夜れ
 空家の懸るもあや初くく
 空を死本そえくくくく
 内より居くく物く初く
 春雲を情くくく初何る

川丈
 稻香
 丈二
 御平
 東川
 乙老
 碓杭
 古橋
 杜年
 紫忠

時雨

春風〜〜松の風堂や初はれ
 葉末春〜木の葉ひら〜初雨色
 春風よ松〜〜身や初志はれ
 片官〜海〜〜初時色
 海の松よ〜〜多能や〜時色
 舟五の林陽よ〜〜初はれ
 楳〜時を〜〜初はれ
 初志はれ〜〜初はれ
 松堂や〜〜初志はれ
 春人の初〜〜初はれ
 春〜〜初はれ

不也
 里中
 果笑
 幻芝
 洋
 札自
 木公
 自需
 廻空
 田高
 栞花

時雨の星を傳ひ初はれ
 何の山花林の空〜時雨色
 海の元空を〜〜初はれ
 春風のあ〜〜初はれ
 人の春ぬ日〜時雨色
 時雨〜〜初はれ
 栞〜時雨色
 春風〜〜初はれ
 春風〜〜初はれ
 春風〜〜初はれ
 春風〜〜初はれ

栞海
 蒼夫
 雲竹
 雨竹
 玉和久
 赤藜
 古翠
 川文
 三丁
 旭立
 無人

日傍を時をよまひて暮る松花
面をくく影をよ来しこれに
志をくく文情もよるぬ 松花
松くしこれ松くくもく時を
相のま死をきくもき時を
おく月を控くくも時を
暮のまや時をの志を 咲
松花をきくもくくお新し
三日くも時を終わす暮の
一時をきくく井の光ら
松花をきくく時を志を

品山
二品
貞雄
宇弘
万聖
不曲
高山
篠山
木司
古翠
鳥足

志をくくや山くもはぬ松花の
時をくく欲くくを低まその
松のまを休くく松し年を
赤空くく時をの中松花二本
梅二本松花をくくくしこれ
松花の時をよきくくも松花
松舟の松の志をくく松花
松くく年を松くく松花の
松中くく年を松くく松花の
松上くく松花の松くく松花
志をくくや山くく松花を

松井
今
少子
馬池
多由女
久藏
范父
信女
無人
無林
赤松

乃座

物情よ寄る花時雨の初りくま
 結一本時雨をよきく結中世
 寄るくく志んれ初るく創りあり
 志んくや寄る花よ志んく海く花
 珠露まきの花のく成る時雨花
 山の日光追産さく志んれが
 米寄よ法海梅さく花時雨くま
 山甲のく志んれ花よ志んれ
 花くく寄る志んれ花の運ん舞
 あり寄よ志んれ花のく時雨が
 花よ志んれ花のく時雨と十く志んれ

情系
 栗笑
 全
 一之
 学井
 昭眉
 素有
 菅平
 竹林
 南山
 松秀

左陸

物情の風初花のく結んれ
 毎此此社業よ山の志んれくま
 寄の尾の志んれと出立時雨花
 花くく寄る花のく結んれ花
 花寄よ困花志んれ志んれ
 志んれくや寄る花のく結んれ
 花寄よ志んれ花のく結んれ
 志んれくや寄る花のく結んれ
 志んれくや寄る花のく結んれ
 志んれくや寄る花のく結んれ
 志んれくや寄る花のく結んれ

竹系
 芦月
 木公
 丈二
 一南
 全
 和
 正令
 谷村
 云々
 全

左佐

初霜

霜

時をさやう人足孔塔ハ通出
 何の意を的まうらん此れ
 偏るまはつと偏し是れ秋の
 あり秋の時をさやう行か山
 日影中の田舎者や結成何
 去るまや白くしるる霜
 初霜や細交少年此るる霜
 去る霜や南のまはるる霜
 相をの薫るまはるる霜
 船よけの雲まきまき霜の
 生初霜の友よ霜初霜の初り

一甫
 碇浦
 素女
 秋影
 龍乙
 芦帆
 出愛
 幻芝
 文海
 天山
 向考

海山まの霜くあもまかり
 吹をさやう風や霜初の毎の考
 鶴の考よ霜初 秋丹敷
 霜の初やぬく持てる過佛
 雲の初し霜の初よりあはる
 山里や霜の初るる霜日初
 生初よ本懸るまやけは霜
 初の霜日初るる霜初霜
 皓柿や霜より霜初山の霜
 百性のつる霜より霜初の霜
 初の霜よ霜より霜初霜

涯美
 甚本女
 裁星
 霜鳥
 今
 一甫
 尚古
 素女
 一甫
 素女
 素女

霜柱

霜花
初雪

霜柱やけしむ月なる美の隅
 畏くけしむ一物や霜柱
 手折く福の力もさしけし霜柱
 月をく周し西の夜しけし霜花
 初雪や月右の層まき米西の
 まつ雪まきしすくく霜花の落
 初雪や気多し角は冠あつ
 まつ雪まき多きまきまき入
 初雪や快出はしすく雪の網
 まつ雪の情もさし志望の里

松海
 うづ
 文傑
 米西
 甫く
 古翠
 旭丘
 羽人
 暮雨
 松秀
 南井

まつ雪まき初め母のふ枝り
 別あまもあし初雪やまき
 初雪の陣出しすく初雪まき
 まつ雪まき時まきし松の若
 まつ雪まき舟も移るる葉の上
 初雪まき柱く屋あも消さす
 まつ雪まき古徳人の名松花
 まつ雪まき湯屋の表の層屋
 初雪まき庭まきすく雪白
 初雪まき庭まきすく雪白
 まつ雪まき母の手傳ふすま

伯夫
 古翠
 芳丸
 一蓮
 竹里
 風毛
 竹子
 夕山
 雨夕
 高安
 斗五

冬構

冬籠

初雪や松蔭はるる且那古
 冬や梅はなほも雪を花
 冬や立山人暮れ荒の葉
 生暗ま初雪の障
 仕やうとあかこころを梅
 海山は雀を成丸をのま
 冬梅さうさあや札紙
 秋のふりし梅さうさ梅
 妻も梅さうさあや梅
 冬さうさ梅梅も一袋
 梅さうさあや梅さうさ梅

原 沙
 氏 梅
 自 雲
 古 翠
 乃 登
 梅 海
 原 谷
 高 安
 全
 素 心
 大 梅

秋のさうさあや梅さうさ梅
 自 松も梅さうさあや梅
 冬も梅さうさあや梅
 梅さうさあや梅さうさ梅
 梅さうさあや梅さうさ梅
 梅さうさあや梅さうさ梅
 梅さうさあや梅さうさ梅
 梅さうさあや梅さうさ梅
 梅さうさあや梅さうさ梅
 梅さうさあや梅さうさ梅
 梅さうさあや梅さうさ梅
 梅さうさあや梅さうさ梅
 梅さうさあや梅さうさ梅
 梅さうさあや梅さうさ梅
 梅さうさあや梅さうさ梅
 梅さうさあや梅さうさ梅

一 陽
 自 岨
 栗 笑
 相 雨
 英 山
 初 梅
 五 登
 梅 登
 玉 和
 羽 人
 梅 々

炉開

龍も友何り當るをを龍
 海山身押何くをを龍
 神よ之を袖生海やを龍
 物ん片の肴板けけを龍
 女も礼いあも當りてを龍
 殊氣をや秋と仙とを龍
 嬌けけは形起あうを龍
 吉あうも障も附福とを龍
 吉あも名も海もや人のを龍
 葉あの中うあ海やを龍
 物もあや柏もをを龍

万里
 面芽
 木目
 高よ女
 全
 冬席
 一菊
 謝堂
 曰人
 一雨
 高よ女

口切

寒

物もあやあも當りてを龍
 嬌を何くもあ海の仕始習り龍
 物もあや柏もをを龍
 物もあや美もをを龍
 物もあやあも當りてを龍
 物もあやあも當りてを龍
 物もあやあも當りてを龍
 物もあやあも當りてを龍
 物もあやあも當りてを龍
 物もあやあも當りてを龍

龍周
 一龍
 柳美
 桂葉女
 岸習
 五塊
 全
 大梅
 一具
 竹了
 子路

冬

新雪の灯も灯りて雪の針の光
 面白き道も踏もぬきてこれ
 木林の古松のくわの音を
 下りてあの上を歩み居る
 冬もさうし折の林の人の声
 は先くともさうさうさうさう
 月あふまも踏も白松の音もこれ
 折雪笑顔のさうりの音も
 折雪の道もさうさうさうさう
 冬もさうさうさうさうさう
 折雪の音もさうさうさうさう

後

新雪
 古松
 羽人
 葛松
 蕙丘
 不曲
 長彦
 雨降
 子之
 山子
 市石

折雪の音もさうさうさうさう
 折雪の音もさうさうさうさう
 折雪の音もさうさうさうさう
 折雪の音もさうさうさうさう
 折雪の音もさうさうさうさう
 折雪の音もさうさうさうさう
 折雪の音もさうさうさうさう
 折雪の音もさうさうさうさう
 折雪の音もさうさうさうさう
 折雪の音もさうさうさうさう
 折雪の音もさうさうさうさう

雪谷
 溪高
 文居
 栢樹
 杉自
 壑浦
 疎翁
 夕山
 芦盡
 幻芝
 夕山

木葉

空を飛んで種をまきふはる花のや
 博志の為さくつらなる花を
 時向くと書ける花の為さくつら
 浮山よみとて佛よ花
 風の音記日は雲空の花を
 木のそとを花をくも風を離れ
 強くく花の音とて花を
 空を飛ぶ人と花をくも花を
 空を飛ぶ花を花をくも花を
 花をくも花の音とて花を
 加賀馬の木のそととて他の花

斗玉 不着 尚古 蜀錦 云く 今 生阿美 一甫 常笠 節之 素志

山茶

一葉をくもくもなる木の葉が
 桐葉のやまきとて木の葉が
 花をくもくも花をくもくも
 さくさくも花をくもくも
 なる木の葉をくもくも
 花をくもくも花をくもくも
 木の葉をくもくも花をくもくも
 木の葉をくもくも花をくもくも
 花をくもくも花をくもくも
 花をくもくも花をくもくも
 花をくもくも花をくもくも

秋登 云く 木公 古之 古川 文海 茶路 相向 蒼雨 羽人 左末

枇杷花

ちよとよおちよとよ枇杷のつるを
 身前の芳名と申す文神老
 久きよ子近き山路やわづら
 重信よ有るもちやゆをた
 さいと所の店に活きし所花
 懐くしとるるやとくし集
 田一牧作らぬ里や枇杷の
 わづらとるる名のとくや
 軽負おちよとるるふと
 月夜をくふ府より枇杷の花
 坪波の枇杷の中を楽く

二丘
 岸島
 文和
 五院
 今
 云
 惟学
 木本
 南山
 陶烟
 一具

八平花
 紅葉散

曲電の振替るる枇杷の巻
 枇杷咲や日おちよとるる
 蕪粉や足代海に初を
 掃溜の山形より枇杷の巻
 ちよとよおちよとるる八平花
 ちよとよおちよとるる八平花
 枇杷咲やとるる八平花
 ちよとよおちよとるる八平花
 ちよとよおちよとるる八平花
 ちよとよおちよとるる八平花
 ちよとよおちよとるる八平花

謝堂
 素若
 初之能
 青地
 原谷
 秋堂
 篠山
 松島
 一雅

銀杏散

枯尾花

小言もや夕日色あてたる銀杏
 古説も一ツも去るは故をいふ
 代士も枯尾の重んじたる銀尾
 梅 梅子以方おれり銀杏散
 銀杏古き薬や志んぐ孝志伝
 一軒了るくはたたり可礼度也
 瀧川の音強くや枯男也
 小雀とよ古の落りや枯尾也
 一日も枯ぬ日只一枯男也
 今雨の晴るるも志ん枯尾集
 中ちくくは枯る中ちくくは枯る

九登 寄付 名村 久藏 榎海 赤木 大費 丁知 一具 一棧 一蓋

枯尾

枯州

古言のよも枯州 尾花うね
 於奈の神徳枯るるや枯男也
 初うねも一尾信るるは尾花也
 枯る後月日の古来を志ん
 う禮尾集也や枯るるは尾花也
 山ありさる礼る枯る尾花也
 号する人の名も枯る尾花也
 獅子舞の道加志るるは尾花也
 枯るる尾花もくく日柳也
 田舟うく日柳もくく号尾花也
 蔓竹の元来もくく枯る尾花也

漆谷 竹了 菰了 桂秀 思文 藤和 寛里 五峴 全 乙雅 水

冬

枯柳

枯柳

草枯も穂も雨も古柳も春
 枯木や宿の跡も也秋の夜
 宿のふむ草も先く枯木も金
 枯木や木もくくも木も葉
 うれ草も味もやくも木も
 う草の巾子も木も木も
 木も草も草の枯も木も形
 枯木や鶴のふ草の蛇の衣
 枯木も木も木も木も木も
 う草柳 川二木も木も木も
 木も木も木も木も木も

玉和之
 柳 宿
 文 海
 去 寧
 廣 宗
 五 峴
 全
 全
 赤 蓮
 文 光
 丸 末

枯芦

枯木も穂も雨も古柳も春
 枯木や宿の跡も也秋の夜
 宿のふむ草も先く枯木も金
 枯木や木もくくも木も葉
 うれ草も味もやくも木も
 う草の巾子も木も木も
 木も草も草の枯も木も形
 枯木や鶴のふ草の蛇の衣
 枯木も木も木も木も木も
 う草柳 川二木も木も木も
 木も木も木も木も木も

如 仙
 藤 雨
 篠 山
 多 女
 十 翁
 才 居
 渡 美
 丈 二
 尚 古
 青 岫
 琴 宗

枯

茅枯く及く風以乾く形
 う乳着の御舟或や枯の糸
 枯河や或く或るこまの乳
 う乾茅子一ましく或る少河か
 枯茅子乃粒里純燈くけう乳
 うまの枯る舟の舟の舟
 枯茅や或く或る或る水
 うれ河の乾風も或く葉子管の管
 枯茅の枯る子やうの枯る形
 う是茅や或るも元のまをん
 若枯ぬ其をや 花も別れ舟

枯海
 古翠
 魚本
 稜葉
 多の女
 文角
 雲也
 杏園
 府堂
 桂葉
 旅海

枯芒

枯河や或く或る舟の舟
 うれ茅や舟子おくれ 舟板置
 以形舟の本を枝やうれすま
 雨より枯るもぬる 芒うれ

各條

舟
 其
 夫
 舟
 舟

枯蔴

蔴ともあはぬ舟の枯蔴 舟
 二形くく踏くく舟河系蔴
 枯蔴子麻ふく舟依屋うれ

舟
 舟
 舟

枯葎

葎の葎舟もつ葎子枯るう
 うの葎をあんう手まうの葎葎

葎
 葎
 葎

枯蓮

枯蓮や舟舟くく舟依
 友舟よま志く枯蔴うう舟

葎
 葎
 葎

冬

枯草

枯草

枯躑躅

石落花

枯草

枯菊

空の草を其ふれぬ草ぬ枯草
 枯草や少くもさうくも一たりの
 市の草と中々の草や枯草
 ちまき乳日乳まうくや石落花
 忘れぬよあ枯草の月日
 みるけく老れぬの石落花
 長枯の草をさうく石落花
 吹去真ふ草の石落花
 手入くく草う先入枯草
 葉の草の心と葉ま枯草
 葉の草と心と葉ま枯草

葉脚
 所脚
 吟脚
 草白
 雨芽
 子孫
 天山
 市席
 床水
 糖紙
 昌足

麥蒔

葉脚 畑の草や少くも
 枯草や少くもさうくも一たりの
 市の草と中々の草や枯草
 ちまき乳日乳まうくや石落花
 忘れぬよあ枯草の月日
 みるけく老れぬの石落花
 長枯の草をさうく石落花
 吹去真ふ草の石落花
 手入くく草う先入枯草
 葉の草の心と葉ま枯草
 葉の草と心と葉ま枯草

万里
 榎海
 素女
 高女
 無林
 度年
 柏樹
 涼谷
 謝堂
 二丘
 不署

大根曳

黒梅屋も高々巻藤城の
 生や三子七の所より大根引
 机増く下巻より大根引
 植枝上巻より少や大根曳
 畑中や大根捲を鳥帽子脱
 ぬり脱ん肩より白や大根曳
 村長も此ん子の白や大根曳
 家々の十巻より大根引
 船首の日く箇人此大根曳
 手近くは後一廻く大根引
 仲向を根子足より大根引

和琴 一 雅 一 操
 今 萬之 才也 一人 松秀

釣下菜

船首を待てるを大根曳
 姉より姉の美より大根引
 二本と巻より巻より大根引
 二投と巻より巻より大根引
 後向く能くより大根引
 七より男より大根曳
 妻の巻より巻の巻より大根引
 引捲く巻より大根引
 以てくくく巻より巻より大根引
 と所より巻より巻の巻より大根引
 舟首より巻より巻より大根引

舟兄 夕山 松秀 左琴 吟霞 一甫 五呪 丁吉 陶烟 松常 種常

冬野

霜遠少く雁はのさめ枯草が
白くやうよきぬ枯草の松の陰
よりきみ強く枯草の日は
赤いのもくあつらうく
あましく冬野の生松も並
古き野の末よき野も
宿りや何ききよよ
冬枯や煙のあつらうく
冬枯より系を入水も
冬枯や枯の落るる畑井戸
冬枯やきよのさめ斗も

葉氏
能因
磐浦
惟孝
智丸
其兆
棲海
松常
田富
左橋
夢雨

冬枯

河鱈
豚

冬枯や何をきき山の家
冬枯や月夜風の戸を
冬枯や山の初め乳を
冬枯や方々く野戸口が
冬枯や月夜を白く一
冬枯やあまきと
冬枯や並一枯の
冬枯や一人と
冬枯や一
冬枯や一
冬枯や一

和琴
友本
二丘
一南
玄く
全
龍化
子強
竹里
謝堂
棲海

石橋く、橋わもさきく、飯の五
 母の事と蓋もとるれん、飯の付
 飯一交二交月と人を橋ひた
 橋くくく、及より、安く、橋より
 橋くかん、橋の部の、内は
 柳茂川の、まゝ有と、飯の骨
 骨も、少くぬ、がうく、橋くく、ひ
 飯付、や、あひ、ひ、あ、交、併、橋、交、交
 飯の味を、覚、く、後の、部、く、れ
 側くく、も、橋く、く、あ、ま、く、ま、ひ、が
 飯付、や、向、向、も、軍、付、ひ

一 籠
 夕山
 雲象
 雲付
 文鬼
 巨壺
 松舎
 川史
 七交
 兼新
 理草

生海鼠

飯付、子、の、橋、も、ぬ、あ、月、く、け
 一、正、の、飯、を、以、さ、く、あ、男、人、が
 飯、を、さ、さ、さ、け、た、さ、く、あ、橋、く、さ
 人、を、さ、さ、さ、わ、れ、く、飯、と、け
 生、海、鼠、骨、を、さ、く、あ、飯、く、あ、松
 三月、月、の、骨、を、あ、れ、く、生、海、鼠、骨
 骨、を、さ、さ、さ、く、あ、中、子、生、海、鼠、骨
 兼、愈、さ、く、飯、ひ、物、の、あ、ま、く、あ
 生、海、鼠、骨、を、さ、く、あ、人、を、さ、さ、さ、く
 人、を、さ、さ、さ、く、あ、さ、く、日、夜、骨
 人、を、さ、さ、さ、く、あ、さ、く、さ、く、れ

一本之
 芦帆
 一竹
 芭角
 松年
 有水
 惟字
 汀丸
 素心
 節之
 青峰

水鳥

鳴鴨をうんうんをうた遊の町
鴨あやうた田子揚る富原の
鴨の来り居るの片や庭の色
星あやうた打らぬ鴨の来り
うたあやうたの聲をの聲を
一概に日の出る鴨の来り
鴨あやうたあけくるお原市
葦の岸北柳の鴨の来り
鴨あやうたの来り五十一万
鳴るやう世話しく来ぬ鴨の来り
旅の及まぬ心や鴨の来り

氷谷 一甫
右橋 五彦
夫山 吉彦
新島 雨戸
芦帆 正令
全

村をうんうんをうた鴨の来り
鴨あやうたの来り五十一万
鳴るやう世話しく来ぬ鴨の来り
旅の及まぬ心や鴨の来り
代書の鴨あやうたの来り
鴨あやうたの来り五十一万
鳴るやう世話しく来ぬ鴨の来り
旅の及まぬ心や鴨の来り
村をうんうんをうた鴨の来り
鴨あやうたの来り五十一万
鳴るやう世話しく来ぬ鴨の来り
旅の及まぬ心や鴨の来り

吟夜 五竹
文和 五岷
一毛 吉彦
節之 四兼
尚古 史子
為乙

上松

星風や和向とま浦のちるる
 管上とくききくすくお松さる
 鳥さの向中をわたり鳴ちる
 別を當るのほ光のちるる
 葉中をけりさるるも松さる
 弓張の月のさるる女情さる
 竹止まらば一夜さるるさる
 村さるるおゆさるるさるる
 遠山の月を限さるるさるる
 松風さるるさるるさるる
 さるるさるるさるるさるる

去阿 五岨 大模 去々 赤序 南自 岩望 模海 竹岫 警平 乐水

星のさるる南風情さるるさるる
 何ささるるさるる松風さるる
 官舟の朝さの馬さるるさるる
 舟波さるるさるるさるる
 山風さるるさるるさるる
 小松さるるさるるさるる
 岸ぬ内さるるさるるさるる
 嶺さるるさるるさるるさるる
 捨さるるさるるさるるさるる
 川先さるるさるるさるる
 伊荒のさるるさるるさるる

家形 李朗 元陸 川丈 長表 木司 栄徑 大梅 兼民 雅周 吉風

恒初も市のまゝに我々の
と我々の鳴や生かす我々の
鶴鶴あふれ生かす行而の及
みうとわは只とまよふ上
新のまじりた少信やと我々の
此のまじりも世に生かすの鶴鶴
吾々の身は生かすも生かすしと我々の
と我々の鳴や夜のとほると我
くあふりふりもかぬ生かす我
はよけのわも生かす鶴鶴
たをまて舟の出ぬわやと我々の

横海 桑種 乙光 全 川 旭 丘 権 塚 易 年 所 洲 懸 心 桑 節

夜真曳
柴漬

細代守

梅初も生かすも生かす鶴鶴
吾々の鳴や生かす我々の
夕夢や一人きり人のみうとわ
お真曳や人の生かすの鶴鶴
柴漬の生かす生かすや月夜に
柴漬や女の生かすの生かす
おの竹や生かす生かす細代守
と生かすと生かす生かす生かす
細代守も生かす生かすや松の生か
世の生かす生かす生かす生かす
生かす生かす生かす生かす細代守

桑 節 乙 光 一 甫 本 席 一 具 竹 弓 床 水 桑 瓶 不 流 多 子 女

類題 十萬句集初編冬之部上終

類題 十萬句集初編冬之部中

洞海舎涼谷編
一具菴一具校合

十二月

山里や十一月孔秘る古笛

多よ女

霜月

霜月や旭の夜の極長

茶枝

喜他

霜月や星の光り丸く来

一南

霜月や極の竹の枝

万里

霜月よ曲里のつる極うね

布席

霜月よ只傳のゆく山をみ

一橋

霜月よつる霜月山のうねり

碧浦

霜月や旭の朝一小田の産

新水

冬至

家自の将本老一油素
心と本所気如室の如専
屋の如相素如の如式
如の如子也如の如専如式
欠如言以平の如言如式
井戸堀の堀云云の如式
过古の如仕如云の如式
冥の如の如子也如の如式
如の如子端一也如如式
如の如子思云の如如式
如の如然云の如如式

全
也蓬
桃鴉
高喜
凉谷
全
丸琴
凉花
素考
大構
布帯

霽
十日

髪置
袴着

髪置の髪置云云の如式
袴着の具如云云の如式
袴着の如如如如如如如
袴着の如子云云の如式
白の如如如如如如如如
白の如如如如如如如如
白の如如如如如如如如
子祭の如如如如如如如
子燈心の如如如如如如如
子祭の如如如如如如如

白
白
高喜
布席
下
白
白
一
確
全
川

貞見世
被下

里軒樂

子祭

子燈心

子祭

月夜

頃や月や梢の掃の夢
るる月のさき物能回の落る
月夜をくさるる船の世う船
山やや三つとつる井戸の結
るる月夜舟の戸口志うけ
夢の月の右布やあつ月
あつ月のほふさうくさつ
誤傳の辻さし曲うやあつ月
少食の末あつくさつあつ月
あつ月のあつ月のあつ月
あつ月のあつ月のあつ月

赤荳 蕉丘 棠二 涼谷 田兼 全 李 全 旭 全 位 全

冬月

あつ月の地よさうあつ月のあつ月
人のあつ月のあつ月のあつ月
あつ月のあつ月のあつ月
あつ月のあつ月のあつ月
あつ月のあつ月のあつ月
あつ月のあつ月のあつ月
あつ月のあつ月のあつ月
あつ月のあつ月のあつ月
あつ月のあつ月のあつ月
あつ月のあつ月のあつ月

碓氷 旗海 此洲 多よ 真秋 才居 涼谷 文海 山権 梨浦 白起

吾の月をみるる山を傳たり
 松平 松とてあまやあまの月
 尖のまに重り伏やあまのこ
 遠影の心なくおぬあまのこ
 月依る様ちしあまの月
 谷道の曲りくやあまの月
 吾の月成切く江よあまの月
 物子末く末言送き世のあまの月
 滝下の貸借もあまの月
 吾の月海木よあまの月
 山とれ楠ささあまの月

夕山
 素白
 戴屋
 竹葉
 一具
 文光
 名村
 一南
 五峯
 全
 大槩

木枯

若き交はれ海を遊ぬあまの月
 風や月の影ぬあまの上
 木枯のそよ風ちるあまの月
 あまの月やゆらぬあまの月
 風と霞をわたりやあまの月
 木枯よ有る風を枯枯あまの月
 あまの月やあまの月
 風や影をわたりやあまの月
 木枯よ以てあまの月
 月の一二を休むあまの月
 木枯の以てあまの月

素白
 雨行
 楽水
 李朗
 文鬼
 長彦
 陶烟
 量山
 不流
 古翠
 粗年

木

本すくし此ふ路と乗や大さき日
 明くも木枯の以とすくか
 風やふ降く落るる空の豆
 本枯や木之廣むの木の出る
 風や形纏の消え鐘の去る
 身道く本枯以や暮の工夫
 本すくし此以とすく言はれ打
 本枯や本年中為り人通り
 風すくし枯ぬ物多く石何卒
 本すくしや之控り油首
 本枯す此路のささ木とすく

桑氏
 今
 大費
 唐年
 一具
 文海
 磬蒲
 南く
 薪水
 呂女

雪

冬

本枯す此路のささ木とすく
 風すくし枯ぬ物多く石何卒
 本すくし此以とすく言はれ打
 本枯や本年中為り人通り
 風すくし枯ぬ物多く石何卒
 本すくしや之控り油首
 本枯す此路のささ木とすく
 風や形纏の消え鐘の去る
 身道く本枯以や暮の工夫
 本すくし此以とすく言はれ打
 本枯や本年中為り人通り
 風すくし枯ぬ物多く石何卒
 本すくしや之控り油首
 本枯す此路のささ木とすく

上七
 古川
 行林
 万死人
 松付
 吟鹿
 西布
 二丘
 出梅
 一蓋

物も生く飛く 空の霞
 ありもすく十日 空のなほ松の雪
 杉の雪一松はくし首よりく
 枝もれん春も雪の又雪も春
 又使も物も雪と松の雪
 世察も雪の六ありし松 物
 神代より風情も是や雪も物
 情雪の戸も積る月日か
 松雪の雪も春あくる月の物も
 生れぬも春中の雪も松の雪
 松の雪も春一松より松の雪

真夜
 雪井
 文光
 信史
 古守
 若右
 孫我
 蕉五
 楳く
 二晶
 古壇

七の雪も松の雪も松の雪
 信史の雪ありし松の雪
 又春も松の雪ありし松の雪
 若右の雪ありし松の雪
 生れぬも松の雪ありし松の雪
 雪のりや松の雪ありし松の雪
 松の雪ありし松の雪ありし松の雪
 神の雪も松の雪ありし松の雪
 情の雪も松の雪ありし松の雪
 松の雪も松の雪ありし松の雪
 松の雪も松の雪ありし松の雪

不曲
 不傳
 龍化
 忍雪
 古翠
 暮母
 鼎湖
 今
 無林
 今
 大貴

竹の香 撓し 後うぬみく
一時や六十好あ 香ふふふ
香う折れや 打切ぬ 暮子論言 雲
手を伸し 雲うく 雲く 松の香
香う 香や ぬ ぬ 香のう
香 伴や 上う 平の 神 西下る
より 向し 此 懐 月も 遠し 香の 屋 根
香 ちる や 庭 小 松 あり 支 物
持 宿 しく 芦 折 ぎ ぬ け きの 香
屋 根の 香 二の 後 ぬ ぬ 戸 口 戸
湯の 香 元も 妙 ぬ 雲の 香 雲の

香 篆
文 海
高 山 女
等 谷
四 明
全
碧 浦
抱 琴
お 赤
松 巢
壮 其

う けん あり ぬ を け り や 香 の 香
又も 山に 花 雲 あり や 香 の う れ
人 初 らう 香 の 勢 ぬ 香 の 香
香 の 屋 根 言 ぬ 低 の 香 け き ぬ
四 角 の 香 色 薫 しく 香 の 香
神 の 香 淵 しく 松 也 戸 口 丸
月 香 の 香 ち 子 雲 雲 を 降 煙 む
障 止 しく 月 香 香 しく 香 の 松
一 新 の 香 屋 香 しく 香 の 松
秋 の 香 送 しく 人 子 あり しく
明日 も あり 香 しく 香 屋 山 香 ぬ

白 起
何 年
荷 了
耕 雲 女
松 竹
松 月
吳 洋
芦 直
木 架
全
桂 秀

ちよとくくと千能を押す門の雪
 何うかして片尻に雪うし松の雪
 雪の音を押しや尻に雪うし松の雪
 雪の白孔いのう雪うし雪の音
 横河を車てく雪うし浮雪の
 修験の蛇物うしや雪うし
 一群よ小を押したり雪の系
 新雪の雪と片羽振灯通る
 雪の日の終りくも雪うし
 雪の山の雪えくも雪うし
 雪の音を押しくも雪うし

一之
 全
 新水
 思文
 古川
 芝茶
 一竹
 芭角
 鷹平
 石流
 友之

一新雪の日の音みたり雪の音
 雪の音を押しくも雪うし
 雪の山の雪えくも雪うし
 雪の音を押しくも雪うし
 大雪うし雪の音みたり雪の音
 大雪うし雪の音みたり雪の音
 大雪うし雪の音みたり雪の音
 大雪うし雪の音みたり雪の音
 大雪うし雪の音みたり雪の音
 大雪うし雪の音みたり雪の音
 大雪うし雪の音みたり雪の音

全
 丈二
 米公
 全
 多よ女
 二丘
 全
 全
 五岬
 全
 不系

香之傳や家の人々の小菜畑
 香之振ひくく一隅のあふもろり
 香の日は二所の角の桜桐草
 香斗一降跡一より新の香
 香の日は香舞舞る言舎うち
 香の香香香うけ新やゆ葉
 香傳もも味次香の傳うち
 香の香香く飛くく香まろり
 脚觸も出は香をいゆる香香
 香枝の並まもま新の香うち
 白程ふもも香の香く香うち

宇香
 知芝
 月露
 向虫
 五竹
 一甫
 一陽
 乙香
 五况
 全
 全

香の香香く飛くく香まろり
 脚觸も出は香をいゆる香香
 香枝の並まもま新の香うち
 白程ふもも香の香く香うち
 香の香香く飛くく香まろり
 脚觸も出は香をいゆる香香
 香枝の並まもま新の香うち
 白程ふもも香の香く香うち

東林
 去く
 香風人
 香出
 素出
 昔谷
 秋堂
 節々
 全
 全
 全

何きく雪を懐くけまの香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香

多由女
布席
全
應
大梅
田華
全
竹油
双二
未夷
文鬼

雪吹

雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香
雪舟の香を懐く雪舟の香

多由女
布席
全
應
大梅
田華
全
竹油
双二
未夷
文鬼

水

氷る水や雪統の上のほろの上
 暖のうらあつもあま氷うけ
 氷る水や新よふゆる谷の家
 氷る水や以て物をえん倉車子
 氷る水や何処やう肉の廣く氷
 一ひきの梅さき氷る雪うけ
 氷る水や松うけ下の氷あじ
 葉の氷抱かて這入る口うけ
 豆有肉屋のつし掃くも氷うけ
 あま新子氷さむ葉をさきえん
 氷る水や雪うけ松うけのも

大梅 雲象 羽人 氷仙 全水 不依 萬葉 尺葉 吟履 一蕙

雪車

雪賦

雪賦

氷る水や雪うけ松うけのも
 雪の雪の中にあま梅うけ
 氷る水や梅うけ松うけのも
 氷る水や雪うけ松うけのも
 氷る水や雪うけ松うけのも
 氷る水や雪うけ松うけのも
 氷る水や雪うけ松うけのも
 氷る水や雪うけ松うけのも
 氷る水や雪うけ松うけのも
 氷る水や雪うけ松うけのも

梅雪 小圃 然葉 草花 謝雪 五枝 柳樹 文来 深谷 有雪

柱板をく実刺て形水う形
扱えとる肉と物と女骨の先
蓋けの房也膚の水う乳
信とて身兒の身をく物と
明女の面を二重子水うと
吹きとる指子のとる物うと
第一目の信と物と女這入口
四子うの形と女と確のあり
山風のるんう形と物と
水う万乳とる湯屋の這入口
高の又見とる他の水う形

文鬼
松自
一之
夕山
去子
今
左琴
木公
今高
丈二
尚古

鐘水
氷柱

霰

る候と竹板氷と且う形
戸の氷の光る自和の
物と是ぬとてとるは物と
持とるもとる戸の信と物
と強と物との信と物と
扱えとる氷の氷柱の信と物
物と信の氷柱ととる女骨の先
涌と信扱てとる物と
玉と扇と信ととる物と
蓋ととる信ととる物と
一と信と信ととる物と

一
兼
雜
雙
瓶
古
有
登
先

谷川や蜆一舟も玉露
 橋止の橋よあなまの河れ舟
 橋の利女の日懐くや花あまを
 夕河れを暮るともも序道ん
 着橋や舟の花河子とふ露
 鶴やを露指しと橋の上
 生河の橋をぬまう河れが
 今河の橋子をるまにあもが
 祝儀の玉露はかき露あな
 中を華子に青の露る河れが
 大粒よを露序也出の河れ

古翠
 菊丸
 高堂
 欠臧
 無峰
 野棠
 一具
 菜蕪
 杜丰
 文富
 休圖

目録

秋の夜を月見の少女露あま
 集ても花さうの露を舟の中
 見れさうの露を志さう菜の露
 米橋の露をさう河れが
 舟中を人舟舟の河れが
 ねるの珠網をさう露あな
 柳廻る人舟舟の河れが
 秋の夜を月見の少女露あま
 松露をさうを物よ露あな
 露あなを物よ露あな
 露あなを物よ露あな

露あな
 乙雅
 迦孫
 露あな
 露あな
 露あな
 露あな
 露あな
 露あな
 露あな
 露あな

雲

冬雨

と我もやうなよよの雪をよ
妻もやうなよよの雪をよ
る市のわけの雪をよ
乃船のやうなよよの雪をよ
帰味しとくたの雪をよ
たつとよよの雪をよ
庭木とよよの雪をよ
飯のよよの雪をよ
妻とよよの雪をよ
やうとよよの雪をよ
梅のよよの雪をよ

一 雪
才 石
作 了
乃 舟
左 船
松 常
一 甫
田 集
左 陸
右 集
棗 へ

巨燧

物もよよの雪をよ
活毛のよよの雪をよ
加茂川のよよの雪をよ
心もよよの雪をよ
梅のよよの雪をよ
上座のよよの雪をよ
掛のよよの雪をよ
梅光のよよの雪をよ
梅光のよよの雪をよ
梅光のよよの雪をよ
梅光のよよの雪をよ
梅光のよよの雪をよ

多 女
全
又 藏
梅 菜
一 具
小 圓
菜 新
才 石
一 飛
双 二

冬

世よふ人かおほけな長焼
物とまよふを思ひたる長焼は
ぬくくしと旭をのきよあつうか
松竹也長焼を囲ふる風
舞合老の侍りや並坐焼
あつうくをまきする老母が
長焼くぬく如棚のおんく
病ふ人よ病物も出る長焼が
病ふ人も病物も出る長焼が
松竹也長焼の庭の岩の音
世よふ人かおほけな長焼は

古陸
松竹
雲霞
一之
全
芦帆
玄子
五
全
集
あよ女

田畑裏

火鉢

埋火

表積一夏月之長田畑裏の
兄弟う横坐半おぬくく
あつうくをまきする老母が
出たよの窓子成るを研
杖うく梅子を出ん中研うれ
大坐研形坐あ人のあつうく
修物の重なり借るを研
隙の手を何くぬてる中研
由海面よよとれ一坐研
燕女の横坐を寄出研
埋火を以つうく成硯あり

あよ女
横海
迦弥
雲霞
キ
磐浦
夕山
尖二
二
五
不曲

嘉徳一夏月之田畑裏の

火鉢

兄やう横坐 半はおぼろしく
あまきりうきをくましくおろし

出たりのおぼろしをすて

杖うら 柵子を出し

大を新 水坐の人のあ

物物の重なるをす

線の手をぬくぬく

水向直子をす

燕女の横身をす

埋中や 以うなる

横街

迦弥

雲珠

キ山

磔浦

夕山

火二

二丘

五岨

不曲

埋火

有りて其を投出は若や樽の
傳人のちと後ひはる樽を
兼て其のちと出や樽の
偏重を去りて樽に向く事
其の張の障も亦一樽の
香りとすも亦も其の樽の
後一樽を定むる如く樽の
樽樽を樽樽の樽や若の樽
若も其の樽を樽樽の樽
右樽は其の樽樽の樽樽
樽樽の樽樽の樽樽の樽

角の女
所業
一具
何事
一書
甫也
友之
寛聖
五况
余也

炭

炭水も投出しくよる樽を
炭の若や子も其の樽の
若も其の樽を樽樽の樽
よも其の樽を樽樽の樽
若も其の樽を樽樽の樽
炭樽を樽樽の樽樽の樽
よも其の樽を樽樽の樽
樽樽を樽樽の樽樽の樽
樽樽を樽樽の樽樽の樽
樽樽を樽樽の樽樽の樽
樽樽を樽樽の樽樽の樽
樽樽を樽樽の樽樽の樽
樽樽を樽樽の樽樽の樽
樽樽を樽樽の樽樽の樽
樽樽を樽樽の樽樽の樽

角の
斜書
羽人
二晶
永号
今
撞積
一具
小圃
子務
斗圃

炭竈

川等の隈を傷を越して越して
 撰くして焚くは乃ちや炭の屑
 炭碎くして一箱の取更へ南
 うけこも男世帯やしらを炭
 炭屑ととも煙る女柿の種
 を移炭の味と成るは生炭が
 柄くして重なり炭の器に際
 炭消へ替へたるの炭見也
 炭竈や老を平ももくし
 炭竈又鬼を移出に於て
 炭竈や焼くは乃ちの炭

植秀
 左野
 川長
 二晶
 禾木
 土の塊
 其路
 薪水
 一具
 一之
 其日

炭

炭焼

炭

炭俵

火桶

於凡や世一電を手に炭
 背戸山や古炭を立るとも
 炭ととも炭をよもゆる古炭が
 炭焼のより方切りを以て
 炭中赤の手に斜白を本なるに
 とも焼の用は乃ちの炭俵
 手も延してともも両の炭俵
 手も延や極の木を此炭を
 松新と赤又木や相や柄
 張るはよ工夫の善なるは柄
 赤のりともも備ふるは柄

其日
 涼谷
 無林
 赤水
 一水
 一蕙
 夕山
 高木
 其路
 其日

冬
冬至梅
冬梅

坐あらんまをさる梅也相中梅
去一あま下坐すらん中梅也
梅生や及く廻凡相中梅
推具の凡の手持ふ中梅也
手あまの老南昔も我中梅也
あくとるま中梅一ツもさ度と
梅くくあまもくくも中梅
梅の素新くぬく向くも中梅
梅ももまぬ見たりも中梅
冬之梅相く大くく咲くも中梅

一 具
菓
熟
荷 乙
杏 園
了 所 人
四 葉
十 羅
風 毛
水
梅 山

冬之梅一ツ咲くも中梅
梅也一と去花の冬や冬之梅
入おの梅も梅も冬之梅
赤まをくまも冬之梅
新まをくまも冬之梅
梅まの梅くくも冬之梅
梅まの梅くくも冬之梅
梅まの梅くくも冬之梅
梅まの梅くくも冬之梅
梅まの梅くくも冬之梅
梅まの梅くくも冬之梅

梅 山
唯 花
久 茶
文 呂
鎌 平
苧 石
丁 知
白 起
水 眉
芭 角
秋 聖

水仙

傍さう二日託夢さうしきの梅
雲の月も影の心を来ぬ梅の心
凡そく跡返りしをを水仙心
水仙の心も持てぬをを水仙
常々さう土月持てぬ儂花
水仙や画子守りしをを水仙
水仙の月も影の心を来ぬ梅の心
水仙の心も持てぬ儂花
月の影も持てぬをを水仙
儂花も持てぬをを水仙
水仙や画子守りしをを水仙

萬里 雨 棠 不 慕 三 棠 一 萬
萬里 雨 棠 不 慕 三 棠 一 萬

水仙

水仙や月の影も持てぬ儂花
水仙の心も持てぬ儂花
水仙の心も持てぬ儂花
水仙の心も持てぬ儂花
水仙の心も持てぬ儂花
水仙の心も持てぬ儂花
水仙の心も持てぬ儂花
水仙の心も持てぬ儂花
水仙の心も持てぬ儂花
水仙の心も持てぬ儂花

萬里 雨 棠 不 慕 三 棠 一 萬
萬里 雨 棠 不 慕 三 棠 一 萬

冬

鷹

鷹狩

鷹野

冬鳥

ゆきたれもくつ子老記 暖鳥
ゆきつるもあけの暖鳥
おまけすくつ飛たうぬめ鳥
身振れも空に飛たう暖鳥
ゆきたれもあけの人も口情 土
くつたれもあけの人も口情 土
岩山や切も通る鷹の空
お鷹の狩もあけの人も口情 土
鷹の狩もあけの人も口情 土
松尾も指末もあけの人も口情 土
ゆきつるもあけの人も口情 土

五和久
鷹く
世傳
文鬼
稲鳥
涼海
葉如
五况
桂葉女
芦帆
涼谷

玉子酒
納豆

布仕お好まざるの中や玉子酒
椀のゆきたれぬのゆきたれぬ
よお人のよくくぬき納豆汁
お鷹の狩もあけの人も口情 土
お鷹の狩もあけの人も口情 土
お鷹の狩もあけの人も口情 土
お鷹の狩もあけの人も口情 土
お鷹の狩もあけの人も口情 土
お鷹の狩もあけの人も口情 土
お鷹の狩もあけの人も口情 土
お鷹の狩もあけの人も口情 土

柳樹
素如
水氷
松秀
方石
節之
極美
味友
友々
素来

冬

橋も後子出さるく納豆が

素白

砂付く、あられもあられ来 一杷

氷乳

娘のしほ堂をさうる云物

後及

今

石河原を吹出さる女許さる

真直

木よりけり一坂通れり

今

あやれをさる女ぬけり

吐き

類題十萬句集初編久之部中終

類題十萬句集初編冬之部下

洞海舎凉谷編

一具菴一具校合

極月 師走

極月や一宿のあも季うさる

三柳

あられをさる女と来河をさる

文光

海原も師をさる早や日の影

高堂

袴着く梅あやう花河をさる

高安

人並に師をさる市を過り能

大貴

とらあやれをさる女と来河をさる

新島

赤裳ゆき師をさる傍りをさる

行九

冬

胤八 衣肥 事納 茶喰

月よあはれ月よあはれ月よあはれ
狸橋をゆく十番立休をゆく
子元荒をゆく子元荒をゆく
織子と掛をゆく掛をゆく
割舟の廻りのくる陸をゆく
誰ハや三尺積る層の重
誰ハやあまねの柿をゆく
夜肥物よりつくろはる海老の殻
不肥 夜の羽をのん後ゆきか
葎生六梅よはつよ了や丸
梅をゆく梅をゆく梅をゆく

芝葉
芦帆
五峴
裁星
字香
夕山
多事
松崎
多事
梅山

佛名會 寒入

機中のあそびもあそびあそび
某ふいほふいほふいと通り
今宵切くくくくく 某ふい
一人はく勇くくくくく 某ふい
仏名や隣くわける実有と
空の入り口も空も空も空も
是れをくくくくくく 某ふい
婚入の餅をゆく餅をゆく
舞の戸の時や糖餅をゆく
客入やゆきも白をゆく
雲松をゆく雲松をゆく

菓子
積巻
若葎
右拳
雨考
一南
名村
五峴
雲松
一南
菓子

寒雨

春の傳もやまゝり而も春の内
意せぬぬ春海乃や春の雨
ちや春の春と春はや春の雨
田畑の出りし春ぬ春の雨
春の春や春日此月の出るま
春の月や望ま春の松の乳
春の春の吹毛春の春の春
春の春も春の春の月の光
春の月の福の縁や春の春
春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春

株海 雑田 多よ女 雨竹 如旭 葛松 摸海 雨明 ちうま 葉海

寒声 寒月

寒念佛

春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春
春の春の春の春の春の春

桂海 涼谷 子路 文海 蓬亭 一竹 一陽 龍化 十泉 松秀 雪井

蒲團

足袋

頭巾

清由子清く残存を返るる
空のまねくつもの魔を返るる
松苗くつくくくくくくく
日のくくくくくくくくく
物ふあくとくくくくくく
先くく計のゆけ出るる
足袋存く一福正上連歌
手一心の足袋存く世話
清も足袋存くくくくく
隣くも存くくくくく
何をもく又取くくくく

と備女
一甫
一水
双二
迦孫
久藏
杜年
小圃
伯夫
尤未

湯婆

古の程若者の何る
くくくくくくくくく
指の盡くくくくくく
植枝子梅もくくくく
既中若くくくくく
松乃中若くくくく
種もくくくくく
手も福くくくくく
捨ん物くくくく
袋戸や若くくく
折ぬる湯婆の何れも

羽人
二晶
高妻
雨明
松菜
雅因
風毛
五峴
一色
玄何

駢

駢

寒菊

寒梅

何くもや表裏待たぬ、数
 あらうの上を子種子喰せ急
 針の夢や折れた風の揺り電
 揺の子の垂垂とあま月秋の
 空にたや空にぬ秋の空 空
 空に葉子落中向くや明く處
 空にまよふ枝は几程の白ひび
 空に葉や相代を四つめ函志
 空に梅や四の解はる春の秋
 空に梅や合くくんとはあきる
 空に梅や蕙とくといはふ川

茅丸
 五况
 植秀
 市席
 雨明
 文光
 乘三
 大梅
 吟處
 杜世

冬椿

冬山

冬

冬梅や花の枝を凍せ
 冬梅や雪の道中 交那合
 冬梅一ひあふふ小一 自
 暎初く日忘るる冬梅をき
 冬梅花の雪の道中 交那合
 冬梅花の雪の道中 交那合
 冬梅花の雪の道中 交那合
 冬梅花の雪の道中 交那合
 冬梅花の雪の道中 交那合
 冬梅花の雪の道中 交那合
 冬梅花の雪の道中 交那合

九琴
 萬之
 兀号
 川也
 了身
 斗延
 了傳之
 涼谷
 御舟
 其笑
 臨事女

冬 蠅

冬の日は一日何となく梅の影
 影も亦く日影さへ亦く梅の影
 赤梅影さへくさへ亦く梅の影
 飯付の石も亦く梅の影
 欄の尾も亦く梅の影
 梅の木も亦く梅の影
 梅の影も亦く梅の影
 梅の影も亦く梅の影
 梅の影も亦く梅の影

南丹
 一南
 半
 凍谷
 古穿
 小圃
 乙志
 素五
 暮雨
 易季
 易季

冬 山

冬の日
 冬の日
 冬の日
 冬の日
 冬の日
 冬の日
 冬の日
 冬の日

山
 二丘
 半弘
 久藏
 山権
 吟履
 棋海
 檢翠

冬 田

冬の日
 冬の日
 冬の日
 冬の日
 冬の日
 冬の日
 冬の日
 冬の日

冬
 水
 冬
 冬
 冬
 冬
 冬
 冬

冬 節季候

冬

冬の日
 冬の日
 冬の日
 冬の日
 冬の日
 冬の日
 冬の日
 冬の日

冬
 水
 冬
 冬
 冬
 冬
 冬
 冬

煤掃

昔者人の所商りて其の世
昔者人の所商りて其の世
昔者人の所商りて其の世
昔者人の所商りて其の世
昔者人の所商りて其の世
昔者人の所商りて其の世
昔者人の所商りて其の世
昔者人の所商りて其の世
昔者人の所商りて其の世
昔者人の所商りて其の世

多喜 布席 史 古陸 里月 月家 回集 甫山 左来 旭丘 松秀

煤掃

とて掃や何ぞ新柳く 东山
煤を以て納戸へ這入旭を
煤を以て不の夕を後たり
田橋 富室の掃やとて掃
すゝ掃の目もさひ有ん長屋が
柴の産や秋枯るけの掃も偏
とて掃てその空るる今宵が
煤掃の如葉の如ら何れも何
料理屋の角は煤を掃か
すゝ掃て見ればもさ掃て下
羽筆を掃て掃て掃て掃

柳坊 大葉 ぬふ 苜谷 抱琴 素石 一竹 全 五 一 甫 写麻人

餅搗

搗手を運ぶやます舟
為所の様子も此の如く
殊掃の中をくまや木賃
餅搗は此の如く
海も自らも旅歴を餅
餅は此の如く
そと搗子私を振く田舎
餅つきは此の如く
林詣りて此の運ぶ餅の電
餅は此の如く
大勢の舟の中へ餅の音

為所
棋海
素朴
四葉
永界
舟筵
周燕
愚山
菊海
五氏
白起

歳暮

曆賣
古曆

於賣
節分
豆打

餅搗は一番を礼へ
餅は此の如く
そと搗やうり
行邊は此の如く
来りて此の如く
曆を此の如く
来りて此の如く
於賣は此の如く
節分は此の如く
豆打は此の如く

松秀
正令
節之
高古
五岨
一具
確積
高古
一先
五岨

古市

舟花より舟花や向河津
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

古市

舟の戸や豆舟花の心やめし交
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

古市

舟の戸や豆舟花の心やめし交
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

古市

舟の戸や豆舟花の心やめし交
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

古市

舟の戸や豆舟花の心やめし交
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

舟の戸や豆舟花の心やめし交
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

年用意

舟の戸や豆舟花の心やめし交
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

舟の戸や豆舟花の心やめし交
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

舟の戸や豆舟花の心やめし交
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

舟の戸や豆舟花の心やめし交
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

舟の戸や豆舟花の心やめし交
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

舟の戸や豆舟花の心やめし交
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

舟の戸や豆舟花の心やめし交
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

舟の戸や豆舟花の心やめし交
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

舟の戸や豆舟花の心やめし交
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

舟の戸や豆舟花の心やめし交
舟の戸や豆舟花の心やめし交

古市
古市
古市

年未

冬

大晦日

嬉人の橋上りや 大晦日
傳のふら陸のや 大晦日

廣るぬふ終とまゝや 大晦日

大仙の舟もも入る 除夜の陸

軍うけきり居きり 大除夜の陸

橋あつく除夜の白ひや 大除夜の粉

人より居あし吹替りぬ 除夜の風

傳のあま空と和り 厄拂

掛えよ軍書と吹ひ 大除夜の

うけきり居きり 大除夜の

居る 大除夜の

素戔

大居

兀号

吉陸

素志

南石

大貫

一南

五

五

除夜

厄拂

掛取

岡見

春隣

春待

春近

年内立春

冬題不知

傳の松書を傳り 大晦日

傳書のふらぬら 大晦日

えらむ向もむら 大晦日

人並よ書あふら 大晦日

もる傳や一橋の伝のま 大晦日

くのそや月一葉と 大晦日

書さつ来と 大晦日

傳子吹や 大晦日

舞一 大晦日

川丈

橋海

松常

玄く

如蓬

五竹

素志

碓嶺

樞鳩

竹如

冬鳥の眼さうしもうとく樹火打
正月の暮るもむかし昆布あう
暮る子躰く草や老る老
山姥もかつたもあいのちうさ
松木の影を枯るす仕籠り
葉木の影枯るす所く柿の枝
秋鳥あうん是も風種の家
枝ありを元まき実や餅ま
回春鳥のや雨向く降りぬれ
鳴鴨もあうさうさう柳の影
は〜秋の暮るまきやさるの流

冬鳥 正月 暮る 子躰 草 老る 老 山姥 松木 影 枯る 柿の枝 秋鳥 元まき 実 餅ま 回春鳥 雨 降りぬれ 鳴鴨 柳の影 秋の暮る 柳の流

枯草の影 暮る 流し 竹の影
さうや人 暮る 本のもよ 暮る 暮

節之 去く

小春の法よあゆ内出く私小春が
石臼の暮るあゆ〜とさるの入
人考のゆ〜と暮るや柿の雪
引ぬのゆ〜と暮る大松の雪
陰の圃此よさるは暮る小春の
米穂さる集る友やさる秋の
雪掃の出れハ竹の 雀うれ
ゆ〜と 凡る 暮る 本のもよ

小春 石臼 人考 引ぬ 陰の圃 米穂 雪掃 凡る 暮る 本のもよ 雀 水 竹 水 葉 雪 水

持も荒は枯く芒や荊の中
 厩くくあくくひ稚子や雪能り
 儀梳も掛さぬ菴や樹を雪
 空の又まもあし志を焚火松葉が
 川上の星くく河をり鴨の姿
 山里も保の乳まきくを乳
 志くくや海の波風は乳尚る
 江の上の弓張月や鴨の姿
 白靴の刀まきくく一老のこ
 中の上と椽元より小春乳
 志極多るを雪の中や海も

其水
 去
 全
 管
 乙
 文
 華
 全
 美
 石

あくくいとくくく日懸山路が
 志掃くく乳飯あひの仕る乳
 情む乳能華おる味也大海日
 志雪のくくくくくくくく小志
 降よりの考ゆるあくく乳くくか
 程くくあくく乳能くくくく乳の姿
 空にけくく茶碗の形や落る水
 落くくくくくくくく板 鹿
 ふくく人一通ふ前や櫓ゆり
 田の畔の草まきく掃を耕せし
 まくく荒の丘板をまきく小春が

全
 志
 全
 全
 其
 全
 全
 全
 全
 全
 全
 全

海より中を抄書や雪の秋
 今
 山人の子孔素是のゆゑや素柱
 今
 山雀の来鳥只今くく雪の空
 今
 引舟の横よりくくゆゑの空
 今
 風や海のくくゆゑの空
 今
 雪のくくゆゑの空
 今
 大の子孔素是のゆゑや素柱
 其
 有るり終のゆゑの空
 出羽
 其
 今
 名はくくゆゑの空
 今
 其
 江

類題十萬句集初編冬之部下終

江戸本石町十軒店萬笈堂英大助藏版俳書目録

〇類題之部

俳諧發句五百題 春秋庵白雄房撰 小本二冊

同 新五百題 田喜庵護物撰 中本二冊

同 新々五百題 全撰 全二冊

同 名所千題集 全撰 全三冊

同 今人東風流 洞海舎涼谷撰 全二冊

同 十萬句集 全撰 全四冊

同 故人五百題 松雪庵撰 小本一冊

同 續故人五百題 具庵一具撰 全一冊

同 類聚 八采園家松撰 中本二册

同 今人五百題 八雲東溟編 涉壁千格校 小本二册

此書 今人五百題 多 びて 余 亦 有 之 云 々 然 其 中 亦 有 其 他 之 書 也 余 亦 有 之 云 々 然 其 中 亦 有 其 他 之 書 也

同 類題 燕庵磨守撰 中本二册

同 古今撰 燕庵磨守撰 全一册

同 新類題 六合庵方理撰 全二册

同 萬題集 不題砂子 八雲東溟撰 全四册

此書 古 萬 題 集 一 冊 云 々 然 其 中 亦 有 其 他 之 書 也 余 亦 有 之 云 々 然 其 中 亦 有 其 他 之 書 也

同 泖叢集 仁比多尾確嶺撰 小本四册

俳諧田毎の目 桃隣天人開 全一册

同 言苗集 錦舎素柳編 笠柄素行校 横本二册

今人發句集 禾木園校輯 全一册

四季發句帳 州丸大人撰 全一册

白話七五三 ○假名遣物 全一册

万葉用字格 春登上人撰 全一册

對照假字格 長野美波田大人撰 全一册

音便假字格 春登上人撰 全一册

○句集之部

嵐雪句集

稱玄峰集

全一冊

其角句集

攻高久成集

全一冊

葵太句集

全一冊

吏登句集

全一冊

巢兆句集

全二冊

完來發句集

全二冊

梅翁宗因發句集

太無發句集

存義發句集

獅子賦發句集

柳居發句集

棋狀瓶

甲斐州九集

葛里句集

遠句集

護物七部集

乙二七部集

饒舌錄

元木綱大人書

三吟未來記

俳諧寐志

春秋庵白痴

今七部集

冬至庵庚年撰

今人附台集

永木園校註

全一冊

全一冊

全二冊

全二冊

全二冊

全一冊

全二冊

全一冊

全四冊

芳草集

田喜庵

全一冊

芦のふり

○季寄之部

戀の葉

葎雪庵北元著

全一冊

俳諧手挑灯

一名俳諧夜話

中本二冊

同 掌中

全一冊

俳諧袖鏡

寸珍一冊

季寄便覽

枚撮

俳諧通言

横本一冊

小木一冊

○文之部

新編俳諧文集

あけしよあめり
文をいひぬ

全一冊

俳諧變態一覽

両面一枚編

袖定規

表俳諧定坐変体之圖

七歌集々の存古哲僧の變化の
了正風俗の自主を一目に
了るべし

俳諧礎

○掌中寸珍物

此書は
集州

掌中五百題初編

集州初編

同

編

集州

編

同 芭蕉發句集 編

同 其角發句集初編 二編

同 嶺雪發句集初編 二編

同 乙由發句集 二編

同 蓼太發句集初編 二編

同 乙由發句集 二編

同 蓼太發句集初編 二編

同 乙由發句集 二編

同 蓼太發句集初編 二編

同 乙由發句集 二編

集卅三編

集卅四編

集卅五編

集卅六編

集卅七編

集卅八編

集卅九編

集卅十編

集卅十一編

集卅十二編

同 前五百題初編

同 編

同 二編

同 古今撰

同 猶追之出刺

俳諧一葉集

同 薄用摺

續今人

掌中

集卅一編

集卅二編

集卅三編

集卅四編

前編五冊

後編四冊

續今人全二冊

掌中全二冊

近世俳諧十家類題集 過日庵祖郷輯 全一冊

名家類題集 同 著 全一冊

續粘尾花集 八哀庵碑領著 全二冊

類題發表集 雜之部 同 著 全二冊

諸國名家集 安房之部 諸國追々出版 寸珍本 全四冊

古今五百題 全二冊

俳諧獨警占 全二冊

俳諧道の便 全二冊

俳諧戀の禁 全二冊

6294
30.3.14

三都

發行

書林

京都三条通掛屋町 大坂心齋橋北久太郎 同 安堂寺町 同 博勞町 同 河内 同 江戶芝神前 同 日本橋通 同 小 同 山 同 通 同 須原町 同 須原町 同 本石町十軒店 同 下谷柳成道

文次郎 喜兵衛 太右衛門 茂兵衛 嘉七 新兵衛 佐兵衛 茂兵衛 伊大 助板

